

一番茶総評

令和4年5月27日

本年度の県内産の一番茶は、2月までは気温が低く推移しましたが、3月以降の降水量がやや少なく、気温は高くなり昨年より5日程遅く平年よりやや早く生産が始まりました。生育は凍霜害の影響もなく順調で、品種間や圃場間の生育差がなく昨年と同様、短期集中型の生産が予想されました。生産が始まってみると芽数の少ない圃場、圃場ごとの生育差、同じ圃場内でも生育差があり、収量があまり伸びませんでした。4月下旬は降雨日が多く、合間を見ての摘採となったため思うように捗らず、早場所を中心に硬葉化したものが見られるなど品質に大きく影響しました。5月に入ると天候も安定し、GW半ばには上場数量が6万kgを超え最盛期となりました。

取引状況は、3年ぶりに緊急事態宣言が発令されず、人の動きが増加し新型コロナウイルス感染症対策をとった中でのイベントの開催や大規模店舗・小売店舗の営業となり新茶商戦が行われました。消費地からの引き合いは弱く、予約注文はあるものの数量がまとまらず贈答用の高価格帯の動きも鈍く、茶商は慎重な姿勢での仕入れとなり品質重視の選択買いが目立ちました。4月20日以降、八十八夜商戦に向けた仕入れが始まってくると、選別買いの傾向は更に強まり高価格帯の需要低迷と降雨による硬葉化・品質低下が重なり厳しい取引となりました。八十八夜商戦の仕入れがひと段落し、年間販売用の仕入れに切替わるころになると、早場所は終了し中・遅場所の数量が膨らみました。中山間地や山間地の形状物は、引き合いが強く堅調な取引となりました。しかし、東部地区の生産が最盛期を迎えたGW終盤には、仕入れに満腹感が見られ硬葉化したものや品質に難のあるものを中心に価格の下げ止まりが見られず、ドリンク原料の需要も低調なことから軟調な相場が続きました。

弊社の取扱数量は、昨年と同様に短期集中型の生産を見越してのミル芽摘採や、5月に入り気温が平年より低く推移したことが芽伸びに影響し、山間地や遅場所を中心にやや少なくなりました。生産量が昨年並みの工場や多い工場、少ない工場など工場間によってバラツキがあり、地域によっても差がありました。また終盤の降雨により摘採遅れとなり、価格安と相俟って摘採を中止した工場もありました。長年、茶価が低迷し工場の経営難による廃業や生産者の収入減による茶業からの離脱、高齢化や後継者難による放棄・放任茶園の更なる増加により今後、生産量の減少が見込まれます。また、昨年以上にドリンク原料の需要が低く、量から質の生産を行なったことも取扱量減少の一因となりました。

繰り越し在庫量はそれほど多くないものの、需要の低迷や先行き不透明感から品質重視の選択買いや必要買いに終始し相場は軟調となり、単価は昨年より1割程安くなりました。単価安に加え、肥料や重油の高騰など生産コストが上がり生産者にとっては厳しい一番茶となりました。